明治四十二年九月

史學研究會講演集 第二冊

東京 合資會社 冨山房發行

史學研究會講演集第二册

總目次

南滿鐵道株式會社圖書館

宋學傳來の淵源……西村時彦……一—四七

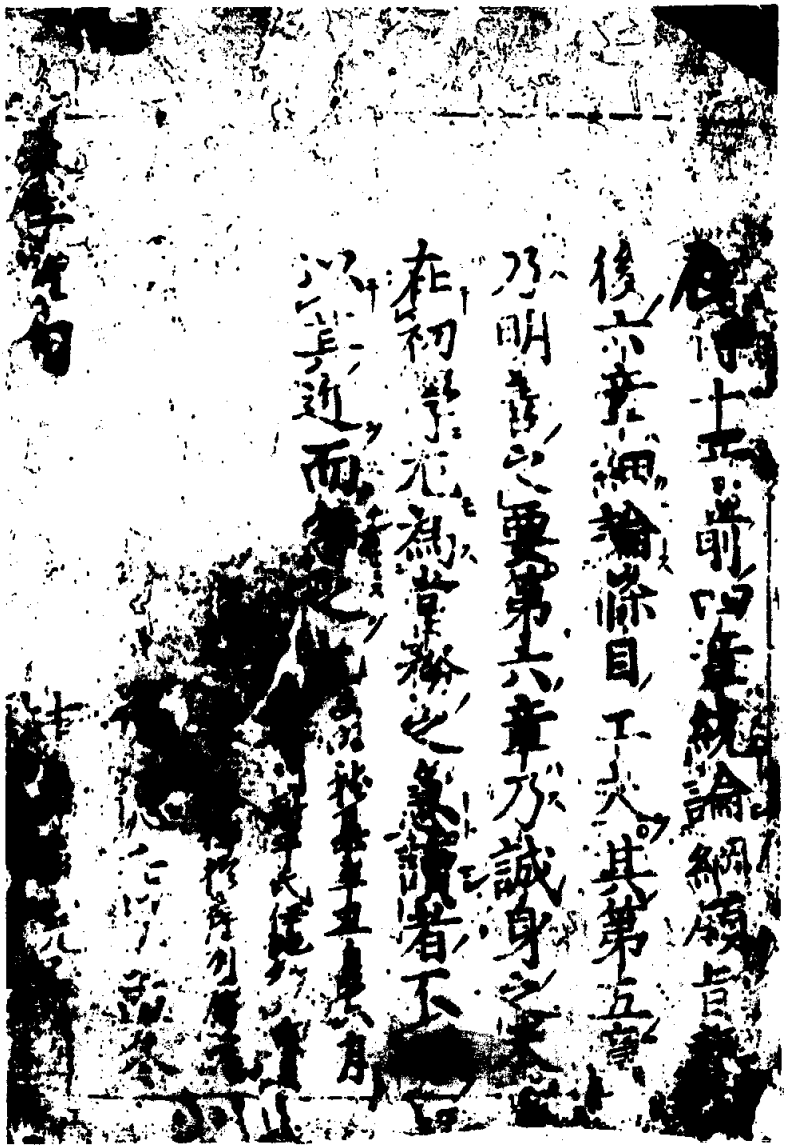
長白山附近の地勢及び松花江水源

附完顏城址考……理學博士 小川琢治……五〇—一二六

東洋史の研究に就きて……伯爵 大谷光瑞……一二七—一三九

碧山日錄の著者に就きて……上村觀光……一三一—一五二

雜錄……一五三―一六一
貝原益軒と京都地方　文學士　伊東尾四郎
貝原益軒の書翰　文學士　幸田成友
彙報……一六三―一六九



桂菴玄樹畫藏

宋學傳來の淵源

會員　西村時彦

去年十月本會に於て、宋學の傳來に關する一場の講演を爲したりしが、後ち筆記を讀むに、杜撰鹵莽、什一を盡さず、因て更に資料を蒐集して、誤脱を增訂し、「宋學の首倡」と題して、大坂朝日紙上に連載せり、然るに「宋學の首倡」は浩繁にして、本編に收載するに便ならず、乃ち要を摘んで此の編を作れり、願くは會員諸君當日の口演を耳底より棄去て、批正[illegible]の篇に與え賜はらんことを、若し其れ本邦宋

學の源流に關する沿革の詳を知らんと欲する諸君は、近刊鄙著の日本宋學史を一讀せられんことを請ふ、此は宋學の首倡を增補訂正して改題出版する者なり。

宋學の傳來を說くに當りて、請ふ先づ聊か漢宋の別を說かん、宋學は漢學に對する名目なり、漢學とは漢土の學と云ふ總稱と爲り居れども、學問上より之を言へば經學の一科にして、漢儒の學なり、古の經籍は、秦始の坑焚に遇ふて埋沒散佚の厄に罹りしを、漢興りて遺書を搜訪し、又獻書の路を開きしより、隱居せる學者は匿藏せる遺經を抱きて世に出てしが、古書の讀み難きより、學者は注解に汲々たり、是れ古註にして、其解猶簡古に過ぐるより、唐代の學者は義疏を作りて之を詳釋せり、註は漢魏晉に涉り、疏は唐宋に涉れども、概稱して漢註唐疏と

曰ふ、其の學風は專ら字義訓詁を釋くより、訓詁學とも稱す、訓詁に依て義理に通する者なり、是より先き後漢の明帝の時に佛經漢土に渡來し、(秦始皇の時梵僧來化し、漢武の時金人あり、佛の漢土に入るや久しと傳へらるゝも、今は普通の說に從ふ)、初は微々として振はざりしも、黃老の說行はれて風尙一變し、六朝の淸談に至りて趨嚮再變すると共に、佛法漸く流布し、唐宋に至つては盛んに上下に歡迎せられしより、韓愈に佛舍利排斥の諫書あり、歐陽修に本論あり、皆楊墨を闢きし孟子を以て自ら居り、佛法を排斥するは儒敎を擁護する所以と爲せり、以て佛法の勢力甚だ盛なりしを知るべし、特に禪宗は宋に至りて大に興り、蘇東坡黃山谷などを初め、高明の士皆之に歸依せり、而して宋學の興りしは此の時なり、宋儒學案を讀む者は、

宋代學統の紛起せるを知らん、而して濂(周濂溪)洛(程明道、伊川)關(張横渠)閩(朱晦菴)の五子は宋學の祖にして、中にも二程と朱子とは道學の中心なり、宋學と云へば即ち程朱學の事なりと云ふも差支なく、朱子は精微廣大と稱して、二程よりも尊崇せられ、宋學と云へば寧ろ朱子學の事なりとやうに看做すも差支なからん、扨禪宗盛行の宋代に起りし宋學は、蓋し禪宗に對抗せん爲に起りしものなるべく、隨て其の學風も漢唐とは相反して禪宗に似たり、其の靜坐反省は禪の坐禪にして、一旦豁然貫通と云へるは禪の頓悟なり、宋儒も訓詁を棄去るにはあらねど、其の專ら講究する所の者は性理にして、經傳の解釋、往々佛語に胚胎したるが如き、宋學を禪に出づと爲せるは蓋し當れり、之を道學とも性理學とも稱し、漢唐の訓詁學に對せり、

要するに漢唐の學は舊聞に據り師承を尙ひ、宋儒の學は心得體驗にして一派を創開せり、是れ或は孔子の舊學に非ざるべきも、一新說を立てたる朱子學派は、學問上に一進運を開きたりと謂ふ可し、我邦に於ける經藉傳來の明文は應神朝に在り、(是より先き西陲の漢土往來あり、神功の三韓征伐あり、經藉傳來は應神朝以前なるべしと傳へらるゝも、今は普通の說に從ふ)、王仁の論語を講せるは無論漢魏の古註ならん、其の後大寶令に學令あり、大學に明經博士あり、七家の儒流あり、其の經を講ずるは皆古註を奉したりしが、後醍醐朝の初期に至りて、忽然として新註即ち程朱學の經延に進講せらるゝあり、程朱學は始て此の時に傳來せしか、將た後醍醐以前に傳來せし者の、始めて史上の明證を後醍醐朝に獲たりしか、是れ本論の研究

せんとする所なり。

古今人の宋學の淵源を考へし者甚だ多し、而して其の說一ならず、古人には貝原益軒(和事始)、山崎闇齋(垂加集)、跡部良顯(南山編年錄)、松下見林(本朝學原)等、皆一條兼良の尺素往來に據りて、後醍醐朝を傳來の始と爲せるが、茅原虛齋(茅窓漫錄)は、日野弘資の手錄を引きて、四書は正嘉の頃に渡れりと云へり、正嘉は後深草朝にして、後醍醐朝より六十餘年前なり、新井白石(退私錄)は、其師木下錦里の談話を錄して、金澤文庫に朱子の小學ありきと云へるが、此の說漠乎たれとも、後醍醐朝以前に朱子學の傳來せるを說くは正嘉說に近似せり、彼の藤井懶齋(國朝諫淨錄)が、垂井廣信始て之を傳ふと言へるに至りては、昔賢已に其瞽者佐々木玄信が妄意造言を信ぜる者なるを辨じたれば、

取るに足らず、而して鼇頭四書大全等に、後小松の朝、應永十年始て四書集註を舶載し、不二和尚之を讀むと云へる者、桂菴の家法和點に本つきて、而して後世諸書に引用せらるゝも、後醍醐朝に於ける史證已に明確なる上は、後醍醐朝以後の傳來說の如き、皆論ずるを用ひず、以上諸說の外に、最も勢力ある者は、伊地知潛隱先生の漢學紀源なり、潛隱は薩摩の人、名は季安、字は子靜、小十郎と稱し、天明二年を以て生れ、貧苦の中に讀書して、秩父季保等と近思錄を講ぜしが、季保擢んでられて家老と爲るに及び、其の與黨を拔擢し、藩政を釐革せんとして事敗るゝや、季安も亦坐して大島に謫せられしは、年二十八の時なり、後ち赦されしも、禁錮せらるゝ者三十年許、六十を越えて出仕し、掌故に通ずるを[illegible]て御記錄奉行と爲り、享年八十六にて慶應

三年に歿せしが、彼の書は禁錮中の天保初年に成りし者なら、ん、薩摩に仕へし桂菴禪師が、朱子章句の大學を刻せしを以て宋學の首倡と爲し、其の事蹟を天下に顯さんとて編著せし者なるが、其の考證に據れば、程朱學即ち四書の類の我邦に入りしは、律宗の祖なる僧俊芿歸朝の建曆元年に在るべし、俊芿建久十年に入菴し、居る者十二年にして、是歲歸朝するや、傳來する所の典籍甚だ多かりし中に、儒書二百五十六卷をも齎らし回りしこと僧史に見えたり、建曆元年は朱子の門人劉爚が四書を大學に刻せし歲なるを以て、傳來の儒書中に四書ありつらんとなり、順德朝の建曆元年は、後深草の正嘉元年を去ること四十五六年にして、宋學傳來最古の說なり、然れども潛隱は俊芿說に猶疑を存じて斷定せず、尤も重きを祖元(弘安二年歸

化)一山(正安元年來朝)の二元僧東渡に置き、祖元の塔銘に、孔釋並隆。無遠不至とあるに據りて、宋學を我邦に唱へしならんと云ひ、禪門宋學の祖なる虎關が、一山に就きて儒釋の書を質問したりと云ふ事實を擧げて、亦宋學傳來の人なるが如く叙述し、次に虎關の性理に達し、度會家行の通書を讀み、玄惠法師が程朱の說を信じたるを說き、義堂周信、不二岐陽、一慶雲章、惟肖得巖、景徐周麟、了菴桂悟等を列記して、遂に桂菴、文之、如竹に及べるは、漢學紀源の大綱なり、古來儒者は佛を忌みし爲か、將た五山資料の湮晦の爲にや、徒に五山僧徒の文權を掌握せるを慨く者あるも、未た嘗て五山僧學の儒教に大關係あるを論じて、其の事蹟を闡顯する者あらず、其の之あるは潛隱の漢學紀源に始まり、宋學の傳來を以て佛徒の功に歸し、五山僧徒の宋

學研究を叙して、考據明確、議論平正なるは、實に學海の津筏にして、其の功前人に軼ぐるや遠し、潛隱蓋し薩摩に刻せられし大學章句を以て朱子著書刊行の祖と爲し、其の事桂菴に出づるより、桂菴の學統を尋ねて五山の僧學に及び、以て淵源に遡りしなり、文部省が日本教育史資料編纂に際し、鹿兒島縣の報告は、專ら潛隱の著作に據りて桂菴の事蹟を特書せしより、足利氏の亂世に大學刊行の盛擧ありし事實、始めて世に知られ尋きて漢學紀源の寫本東京に出るに及びて、學者間に喧傳せられ、後の宋學源委を論ずる者、皆材を此の書に取らざるは無し、潛隱の功豈大ならずや、扨今人の宋學傳來を說ける著作には、國學院雜誌(明治三十三年八月)に、花岡安見氏の「朱子學の由來」あり、東洋哲學(明治三十四年十一月)に、足利衍氏の「朱子學の

傳來と其の學派」あり單行の書には、久保得二氏の日本儒學史（明治三十七年十一月）、井上哲次郎氏の「日本朱子學派の哲學」（明治三十八年十二月）、川田鐵彌氏の「日本程朱學の源流」（明治四十一年二月非賣品）等あり、簡より繁に趨くは、出版の前後に從ひ、後出の書は前出の書よりも詳備せるは、史學上の原則に洩れず、而して宋學傳來の時期は、或は俊芿說に從ひ、或は一山說を執ること相同じからざるも、要するに皆臆斷にして史證なく、且つ漢學紀源の上に出つる者、未た之あるを見ず。

是に於て予は宋學の淵源を研究すべき餘地猶存ずるを知れり、謂へらく文化の輸入は交通に因らざる無し、三韓交通には、歸化韓人に依て儒佛二教の貢獻あり、隋唐交通には、使臣學僧學生に依て、文學美術及び顯密二教の輸入あり、唐末暫らく

使聘を絶ち、宋興りて再び交通を求めしに、王朝の衰は圖南の翼を振ふ能はざりしも、貿易の趨勢は抑止すべからず、博多を海口としての彼我商船の、來往頗る多く、僧奢然を初として、嘉因、寂照、成尋等の入宋僧は、前後相繼き、近衞帝の仁平元年なる南宋の高宗紹興二十一年には宋人書藉を進送せしことすらあり、平氏執政の比に至りて、日宋交通最も盛んと爲り、俊乘坊重源、覺阿和尚、榮西禪師等の入宋を初として、佛工の來朝あり、重盛の沙金を育王山に送るあり、此は皆俊芿以前の交通にして、宋儒の著書を傳來すべき機會に乏しからず、當時唯一の學者にして高倉帝の侍讀なる清原賴業が、禮記中の學庸二篇を尊びしと云ふを以て、程子の卓見に符すと稱したるが、當時已に程子の書を舶載せしことありしやも亦知る可らず、俊芿四

書を齎來したるならんといふは、僧史に儒書二百五十六卷とあるに據るのみ、如何なる種類の儒書なりしやは明ならぬに、直に四書と臆斷するは、奇警は則ち奇警なれども、史證と爲すに足らず、而して予は日宋交通の盛んに觀て、周張程朱其人の年代に隨ひ、其書は數回に分來せしならん、太極圖說の如きは最も早く、俊芿以前に傳來せしならんと臆想し、劉爚四書を大學に刻したる年に歸朝したればとて、俊芿が四書を齎來しつらんと爲すは、太早に失すと思ふ。

然らば則宋學の神髓にして新註の精華たる四書集註の傳來は何の時ぞ。

日宋往來は俊芿時代より益發達して頻繁と爲り、源實朝の如きは歸化の宋人陳和卿をして大船を作らしめ、自ら海に航

して宋に游はんとせし程なり、僧徒には道元、辨圓、相繼きて入宋し、洞濟二禪を傳へてより、其徒の海に浮ぶもの相踵ぎ、而して道隆、普寧、正念等の宋僧も、亦踵を接して來化せり、彼等は求法傳智の外に、文物工藝をも齎來しつ、豈獨り學術を遺忘せんや、況んや禪と宋學との關係は、甚以て密接なるをや。

前賢概皆宋學は禪に出づと爲す、宋儒は儒敎を闡明して佛法を排斥せんが爲に、性理學を唱へしが故に、努めて佛を譏り禪を罵りたれども、佛徒は却て宋學の禪に出づるを喜びて其の書を讀めり、蓋し宗儒の性理は易の窮理盡性に出づ、而して禪の見性成佛も、亦易を以て羽翼と爲す、性の一字は實に禪と宋學との聯鎖たり、其の關係如此くなれば、彼我來往の禪僧にして宋學に出入せざる筈なからん、而して洞濟二禪の祖なる

道元、辨圓、及び最初の歸化僧なる道隆、普寧、正念等は、最も大切なる注意人物なり、然るに漢學紀源は此等僧徒の名は、漠然列記するに過ぎずして、多く商量を費さず、而して後人の著作も亦意を此に經ざるは怪しむべし、予因て聊か諸師の語錄外集傳記等を涉獵せしに、朦朧氣に宋學の痕迹を認むべき者多し。

道元(承陽大師)は常に儒を貶して佛を崇め、天地懸隔なと云へるは、例の佛徒の套語なるが、其の正法眼藏にも三教不一辨あり、臨濟派が儒釋一致を說くに反して、其の道同じからずと爲せる、兎も角も卓見なり、然れど處々儒語を引用して佛意を助けたるに觀れば、儒學の力すぐれたりと知らる、但其の弟子懷奘の正法眼藏隨聞記には道元の說を揭げ、論語の三復白圭の章を解きて、「宋土の賢人等の心は、三度復さふすと云ふは、幾

度も反せと言ふ心なり」云々とあり、宋儒の說を引きたるにやと思へど、集註に據れりとは見えず、其餘見る所なけれど、道元入宋は俊芿歸朝に後るゝこと十二年なれば、宋土賢人の學を見問せざることやある、辨圓(聖一國師)入宋は、道元入宋に後るゝこと又十二年にして、六年後に歸朝せしが、其の年譜は北條時賴の爲に大明錄を講すと記せり、大明錄には程朱の說をも引けること虎關の通衡に見えたり、即ち知る辨圓は程朱の學說にも通せし人なるを、且つ彼は堀河大相國源基貞に儒佛老三敎の大意を問はれて三敎要畧を著はし、龜山法皇の爲に三敎の旨趣を說き、又三敎の典籍を作りて普門書庫に置くとあり、是れ豈宋學齎來の祖に非ざるなきか、道隆蘭溪(大覺禪師)の歸化は、辨圓歸朝後五年なる寬元四年に在り、大覺禪師語錄に

左の語あり、

大病の源は盡く情を恣にして而して起るに在り、萬行の本は己を修めて而して明なるに非ざる莫し、己れ修まらざれば、則行廉ならず、情若し恣なれば、則病愈盛なり、

參學は猫の鼠を捕ふるが如し、先づ身を正して直視し、然る後他の緊要處に向て一咬咬定し、走作する莫らしむ、道を究め玄に參するも亦復如是し、首め其の心を正し其の意を誠にし、目は邪視せず、口は亂談せず云々。

從上の諸聖、皆自ら諸を己に反求して不疑の地に至る、且己に反るとは何ぞ、一切處十二時に於て、一々自己の上より反覆推窮す云々。

是れ皆宋儒克己の學にして省察の工夫なり、特に大學の正

意誠意を說くに至りては、正に是れ宋學中の人なり、道隆又嘗て時賴に謂て曰く、天下の大事は剛大の氣に非ざれば、以て之に當るに足らずと、是れ孟子の浩然の氣至大至剛を說きし者なり、儒僧に非されば此の語ある可らず、宋學の祖辨圓に非ざれば則道隆ならん。

近比某氏の古文舊書考を讀むに中に舊刊本考あり、寶治版論語の識語を錄せり、曰く、頃得婺刻宋大儒紫陽先生論語十卷。驚動。刻以餉好古君子。寶治元年丁未、陋巷子謹跋と、著者は予所觀儒書墨版。蓋以寶治元年論語集註爲首倡と明記しあれども、其の何人に藏せられ居るやは記載なきを以て、之を著者に問合せしに、其の書は埼玉縣川越の新井政毅翁の藏書に係る、翁は好學の爲に家產を蕩盡せしが、藏書萬卷あり、近時宋元の古

版及び五山版等は他人の手に落ちしも、唐鈔本漢書孝文紀、寶治版論語集註は、猶其の家に寶護せるなるべしとの返書あり、論語集註果して寶治元年に刻せられ、其の書果して天地間に現存したらんには、是れ實に宋學傳來の時期を徵すべき好史料なり、寶治元年は實に道隆歸化の翌年なれば、其れ或は道隆の將來する所か、然らずんば辨圓が三教典籍中の一か、將た俊芿が二百五十六卷の儒書中の一か、好し何人に因て齎らされたりとするも、果して此の書ありとすれば、寶治以後の宋學傳來說は此の書に因て雲消霧散せざるを得ず、然るにても斯程の至寶、何とて今日まで世に顯はれざりしにや、本邦儒書開版の嚆矢として、將た宋學傳來の史證として、大切なる此の書を發見せし著者は、何とて其の傳來と板式とをも詳記せざりし

か抑陋巷子とは何人ぞ、顏回原憲の徒と覺しきも、寶治の昔に儒書を開板せん程の者は、草莽の處士に求む可らず、旁頗る疑ふ可き者あるを以て東上の折、著者に面質せしに、要領を得ず、因て友人托して川越の新井氏を搜訪せしも烏有に屬し、其舊藏書目にも似寄りたる書名だになし、聞く大學史科編纂掛も、嘗て同地の中學敎師に托して同書の有無を調べしが、果して得る所なかりきと、然れば謂はゆる寶治板論語なる者は、子虛氏の說にもやあらん。

道隆以後の歸化僧には、普寧、正念、祖元、一山等の順序なるが普寧の兀菴語錄には、君子務本。本立而道生。此本即是自己本命元辰。本來面目と云ひ、正念の大休錄には、居仁由義、窮理盡性と云ひ、皆好んで儒語を用ひたり、祖元や一山や、亦皆一時の名僧に

して、內外の學に通せしもの、特に一山は釋典諸部儒道百家稗官小說にも通したりと見え、且つ奧州松島に存せる一山自撰自書自刻の賴賢碑の如き、先儒嘖々之を稱せり、以て其の學術を知るべく、其の門下には朱子學に精通せし虎關師錬を出せしが如き、實に禪門宋學の風尙を皷吹せしや論なきも、傳來の祖に非ず。

以上は古今人の諸說と異なれる予一己の鄙考なり、宋學傳來の時代いと古かるべしと思はるゝこと如此し、然れは後醍醐に至りては、早く已に研究の時代に入れり、而して後醍醐朝以下は記載分明なり、蓋し我邦の史籍に、始て宋學の記載あるは花園院御記なり、元應元年の條に、資朝公時等、御堂殿上の局に於て論語を談するを、竊に立聞ありて、玄惠を達道と稱せら

れ、元亨二年七月五日には、尚書の談義あり、其意涉佛教。其詞似禪家。近日禁裏之風也。即是宋朝之義也とあり、凡近代儒風衰微。但以文華風月爲先、不知其實文之弊以質可救之然者近日禁裏有此義歟尤可然事也と御賛成あり、元亨三年七月十九日の條に、凡近日朝臣以儒教立身、尤可然、政道之中興、又因茲歟、而上下合體所被立之道、是近代中絶之故、都無知實儀、只依周易論孟大學中庸立義、無口傳之間、面々立自己風、依是或有難謗等歟云々と見えたり、論孟大學中庸の四書の名始て、此に見え、即是宋朝之義也とあれは、四書の集註なること分明なるが、元應元年の條に、資朝好學七、八年、頗得道之大意とあるに徴して、禁裏の風を學べる資朝が七八年前より修めたる學問は、必定宋朝の義なりしを知るべく、玄惠の達道も亦宋朝の義に達せしを指す

や明なり、然れは四書の名目こそ元亨三年に見えたれ、宋學の研究は、後醍醐即位の元應元年以前に在りしや知可し、是れ一山歸化後十餘年の事なり、一條兼良の尺素性來に、近代獨清軒玄惠法印、宋朝濂洛之義爲正、開講席朝廷以來、程來二公之新釋可爲肝心候也とあるも、亦兩記に符合せり、大日本史玄惠傳は此の文に據りて、先是經筵專用漢唐註疏、至是玄慧始唱程朱之說、世人往々多學之者と明記せしは、誠に儒林の一大光彩なり然れど、同書に後帝竊謀滅北條氏、權中納言資朝贊成其事、設無禮講、結將士之心、恐爲人所怪、陽延玄慧使講書とあるは、太平記に人の無禮講を咎めんこともやあらんとて、事を文談に寄せん爲め、玄惠をして昌黎文集を講せしめられけるが、昌黎潮州に謫せらるゝ詩を講するに至りて、不吉なりとて談義を止め

たる由記せるに據りしものなるが、此は太平記の作者が、正中發難の俊基東下り資朝佐渡遠流等を、昌黎の潮州遷謫に比して、附會せる小說的記事のみ、花園院御記の元亨三年七月十九日の條下に、近日風體以理學爲先、不拘禮義之間、頗有隱士放游之風、於朝臣者不可然歟、此是則近日之弊也とあり、後醍醐君臣打解けて學を講したまひ、果は隱士放游の風に流れ、又將士をも會して、官位に拘らす聽講を許したまひしもの、即ち無禮講の由來なるべく、決して人目を避けん爲に、玄慧に書を講せしめられしに非ざるは、御記の文に徵すべし、蓋し帝夙に回復の志あり、朝臣の文弱を振ひ名節を磨礪するには、宋儒の說を尊ぶに在りと思召して、宋學を進講せしめられけん、南宋偏安の世に在りて、道義を講明せし朱子學は、士氣を振作するに適應

すればなり、然れば花園院も政道の中興茲に因るかと仰せられ、資朝俊基親房等の如き忠臣も、此の禁裏風なる學派中より現出したりしものなれば、大日本史の陽延玄惠の陽の一字史實を失ひ、剩さへ御醍醐講學の御本意をも失へり、讀史者は宜しく御記の文を味ひて、後醍醐帝が中興の爲に宋學を講したまひしを知るべく、元亨講學の結果は、一たひ正中の發難に敗れしも、遂に建武中興の功を收めしをも知らざる可からず。

虎關の元亨釋書濂西傳贊に周濂溪を引き、其の濟北集に程朱の學を論じたる、亦御記に次きての古き宋學記載なるべし、虎關は濂溪に服して程朱に慊たらず、特に朱子が禪より出て〻禪を譏るを惡み、自ら明教大師の禦侮を以て居れり、亦一卓見にして、後世徂徠などの朱子を譏るは、虎關を祖述する者に

似たり、虎關の宋學は一山に出づるも、玄惠の學は其の出づる所を知らず、或は虎關玄惠二人は兄弟なりとの說あれど、猶確ならざるに似たり。

玄惠の學派は、源親房其の蘊奧を得と稱せらる、親房の學や、神儒佛を混し、陰陽纖緯の說を交ふるも、神皇正統記の議論正大なり、潛隱は楠正成をも宋學者と爲せり、正成好んで論語を讀みしと聞くも、宋學は之を知らず、玄惠後ち足利氏に歸して其學も亦北朝に傳はれり、光嚴光明二帝の侍讀たりし菅原公時も、光明帝侍讀紀行親も、元亨講學の徒にして、宋學を玄惠に受けしもの、常に四書を進講せしが、行親が大學進講の詩に、只要新民日々新の句あり、新註を奉せしや明白にして、學庸に新註を用ふること、已に此の時に行はれ、清原業忠に始まりしに

非さるを證すべし、玄惠を尊信せし一條兼良は、即ち桃華老人と稱せし應仁中の大學者なり、當時中原康富は玄惠抄書の論語を相傳して、之を花山院中納言に授けしことあり、清家には業忠始て論孟は古註學庸は新註の家法を立て、環翠軒宣賢以下之を奉して以て德川氏に及べり。

虎關の學派は中岩圓月に至りて、禦侮より崇信と爲り、義堂周信は足利幕府に勸むるに新註を以し、岐陽方秀出るに及びて、應永十年の舶來四書に始めて訓點を施せり、是れ四書和點の始と傳ふるも、其書傳はらねば、如何なる讀法なりしやを知る可らず、岐陽の門下に駿足多し、雲章一慶尤も性理學を好み、諸山の名衲を會して百丈淸規を講するや、往々宋儒の說を援引せり、惟肖得巖も亦文を能くして宋學に達せり、得巖別に雙

桂と號す、雲桂二門の俊才、散して海内に居り、以て宋學を分布せしが、我か薩摩の桂菴禪師の如きも亦其の一人なり、是より、先き後醍醐の元亨二年、沙門素慶と云ふもの、古文尚書孔氏傳十三卷を刻せり、其跋に儒以知道、釋以助才の語あり、儒道釋才は蓋し鎌倉以來の時代的思潮なり元僧の來化は、明極、梵仙、正澄等あり、明僧永璵以後は之なかりしも、我が禪僧の入明は益多く、隨て詩文も流行し、儒學も亦盛行せり、當時の臨濟派禪苑は、儒釋不二を理想とし、此の理想は中岩義堂岐陽に至りていよ〳〵發達し、其の門下生の字號は、皆儒語に取るもの多く、此の時代の外集に載せたる字の說は、概皆聖經賢傳の講釋なり、而して儒書の出板は元亨二年の尚書に次きて正平版論語あり、正平版論語に次く者は、實に桂菴の門人なる薩摩の伊地知

重貞か刻せし文明版大學なり。

桂菴は周防の人なるより、世之を大内文學の產兒と爲すも、所謂大内文學は義隆時代を言ふ者にして、桂菴は義隆以前の人なるが故に、大内文學桂菴を生みしにあらず、桂菴等の力に因て大内文學は出來たるなり、大内領の防長二州には、岐陽も來り、惟肖も來り、其の高弟も來りて大刹に住せしことあり、且つ大内氏が明韓使聘の事を總管せしより、足利氏の外交秘書官たりし惟肖得巖と大内氏とは、緣故尤深かりき、斯る關係より、大内氏に宋學の風氣を吹込むこと已に久しく、桂菴も亦斯の緣故に因て、南禪の惟肖に師事せしならん、而して後世には義隆の如き興學の人をも產せしなるべし、扨桂菴は得巖に師事せしも、其の宋學は之を岐陽の門人なる建仁等の惟正明貞、

東福寺の景召端棠と云へる二僧に受けたりとは、文之の南浦文集に記す所なり、此の二僧の事蹟詳ならず、(漢學紀源には了菴、景徐、蘭坡等を桂菴の學友と爲すも、景徐、周麟は蘭坡の門人にして、桂菴の後輩なり)、後ち明に使して杭蘇の間に留學すること久しく、歸朝後亂を石州に避け、歸りて赤馬關の永福寺に再住し、尋きて九州に游びて、肥後隈府の菊池氏に客と爲り、菊池聖廟の釋奠を觀て二律を賦し、遂に島津氏の聘に應して薩摩に入りしは、文明十年戊戌二月二十一日なり。

薩摩に於ける桂菴を說かんとする前に、菊池聖廟に關する鄙考を述べんに、或る今人の著書には、菊池氏は桂菴の勸に因て釋奠をも行へるやうに記したる者あれど、此は大間違にて、菊池文學は桂菴以前に開けたること久し、菊池氏は九州の舊

家名族にして、建武中興の功臣第一なる寂阿入道武時が和歌を能くしたるにも、其の好學の家風は知られたるが、傳說に據れば武時及ひ其の子武光は、入宋僧の寒岩禪師が上足たる大智に師事せりと云ふ、大智は入元の名僧なり、武光の時、征西將軍懷良親王の御下向には、都より隨從せる文臣も多かりけんが、中に五條賴元あり、儒學の家なれば、後醍醐朝の文學をも齎らしけん、武光明主に贈れる文中に、「論文有孔孟道德之文章」「論武有孫吳韜略之兵法」の語あり、本居宣長の馭戎慨言などに、痛く此の書の失體を指摘したれども、菊池氏が亂世に在りて、孔孟の道德を講じ居たるを證するには餘あり、所謂孔孟の道德、或は後醍醐朝の禁裏風即ち宋學なるなからんか、然らぬも武光武政武朝三代の明國交通は、文化を輸入せしを疑はす、武朝

の子持朝、及ひ其子爲邦は、元志寛中を師として禪を學び、爲邦尤も文武に長し、常に好んで碧巖を讀めり、岐陽の弟子惠鳳翺藏主の竹居淸事には、爲邦の學を稱して、中興孔孟之儒雅の語あり、彼の聖廟は、爲邦隱居して其の子重朝家を嗣きし時代に創立せし者なれは、爲邦の命に出てしや明なり、宜なる哉中興すと稱せしや、惟肖門下の希世靈彥、嘗て重朝の詩を觀て、美哉此詩、誠有微意とて其戀闕の志を稱せり、以て其の學本原あるを知るべし、詩僧横川景三が重朝に贈りし詩に、西州風俗聽人說、戶々民村夜誦書の句あり、應仁文明の亂離の中に在りて、民村戶々絃誦の聲ありとは、扨も菊池文學の普及驚く可らずや、是れ決して一朝一夕の養ふ所に非す、而して桂菴の菊池氏に客たりしは重朝の時なり、重朝の重臣に隈部總州忠直と云ふ

ものあり、賢にして學を好み、桂菴を優禮して至らさる所なし、君賢臣良なること如此し、其の風俗知る可し、當時源基盛と云ふもの、自寫の四書集註に、桂菴の口授を受けて訓點を加へたりと云ふ、此の寫本四書は桂菴に因て始て菊池氏に入りしにはあらで、桂菴以前より肥後に入りて傳寫されし者なるべし、果して然れば宋學の肥後に行はれしや久し、風氣の開けて教化の普及せること如此ぐなりし菊池も、其後强鄰の爲に囚されて、今は孔子堂址と云ふ一片の石を留むるに過きさるは悲むに堪へたり、予は肥後人士が聖廟再建の擧あらんことを望むや切なり。

斯くて薩摩に入りし桂菴は、國主島津忠昌の優遇を受け、上下士人の師事する所と爲れり、抑薩摩は古來隋唐交通の門戸

にして、文化の此地に歸遺されし者、古寺院に點綴せり、足利氏と爲りても、博多、山口、堺と均しく、漢土交通の海口たり、蓋し當時京都を除きて、文化の盛なりしは亦此の四處なり、是れ文化輸入の門戸なれはなり、正平版論語は堺に出でゝ、後ち天文版論語も亦堺の醫師阿佐井野氏に成れり、博多は日宋最初の開港場にして、宋元人の歸化も亦多く、是に於て歸化元人俞良甫の博多版あり、(後ち嵯峨に刻して嵯峨版と云ふ、詳は朝倉龜三氏の日本古刻書史に出づ)、山口は足利氏の外務大臣たりし大内氏の治所にして、明韓の文化を吸收せし結果は、今も大内本の名を留めたり、薩摩の鹿兒島豈獨り其の後に落ちんや、正平版論語及び博多版諸文集より後れて、而して天文版論語及び大内本數種よりも前なる文明十三年に、朱子章句の大學一册

は、桂菴の門人伊地知左衞門尉平重貞に因て鹿兒島に刻せられたり、重貞は畠山重忠の末孫にして、島津氏の國老なり、此の書盛んに當時に行はれて版木磨滅せしものと見え、十一二年を經たる延德四年壬子(此の歳改元明應)には、桂菴の桂樹禪院に再刊せり、文明版大學は天保中に伊地知潛隱力を盡して搜訪するも、亡佚して存せず、延德再刊本も亦寥々たりきと云ふ、予は潛隱の孫女婿にして予が再從兄弟なる種子島月川氏より贈與されし延德版大學を藏せるか、其の卷尾の識語左の如し。

文明龍集辛丑夏六月左衞門尉平氏伊地知(此の間に一字ある者の如きも分明ならず)重貞命工鏤梓於薩洲鹿兒島

延德壬子孟冬桂樹禪院再刊

文明龍集の三十字は小さき行書にして、重貞の自書と覺しく、延德壬子の十二字は稍大きく、本文と同形の楷書にして、桂菴禪師の手蹟なるや疑なし、此の書翻刻ならんには、命工重梓などあるべきに、左はあらずして命工鏤梓と云へるは、新に書手に命じて寫さしめしを刻せしに相違なし、潛隱は其書を以て桂菴の手に出づと爲せり、今桂菴の自筆なるべしと思はるゝ延德壬子の十二字と、經傳の本文とを比較するに、寸分も違はぬ同一筆蹟なり、即ち知る疑ふべくもあらぬ桂菴の筆蹟なるを、桂菴の眞筆は予れ廣搜遍訪するも獲す、唯此の延德板大學の端正なる細楷を見るのみ、嘉風魚雨四百十七八年を經たる日本最初の刊本大學にして、而かも桂菴の手書に成れるもの、煌々として天地の間に是存するは、誠に學界の爲に喜ぶ可

らずや。(寫本延德版大學は內閣書目に見ゆ)

桂菴は更に岐陽の訓點を修正して四書に加點せりと傳へらるゝも、其の書は散逸して、獨り家法和點一册を存するのみ、訓點の法大略知る可し、此は如竹散人寬永元年に刻せしもの今に行はる、近比本會員なる雜誌禪宗の主管上村觀光氏活刷して同志に頒てり、文之和尙の文之點は此の家法和點に本つきて桂菴點を潤色せし者なり。

文之は日州の人、桂菴の學は月渚英乘(入明僧)之を二州一翁に傳へ、二州一翁之を文之に傳へたるが、當時薩摩に歸化明人黃友賢あり、江夏と改姓し、環溪と號す、二州之を友として益を受け、二州寂後は、文之も之に從つて宋學を受けたりとぞ、文之の著書は其の門人如竹散人之を刊行せしが、文之點刊行は寬

永四年なり、文之は文章を以て勝り、如竹は德行を以て勝る、如竹は屋久嶋の人、初め藤堂高虎の侍讀と爲り、中ごろ琉球王世子の傅と爲り、又帷を浪華に垂れて、浪華文學傳開卷第一の人なり、晩年島津光久に侍讀して、此に再び桂菴派の宋學は薩摩に行はれ、專ら躬行を尙ひて士氣を砥礪しき。

岐陽派の宋學は一方に先つ薩摩に行はるゝ如此くなりしが、一方には程經て周防の大內氏に花を咲かせたり、大內義隆は數多の文臣學僧を京師より招致して、當時の諺にも流竄公卿墮落沙門の評あり、藤原實隆に朝儀を質問して多々良問答を著はし、清原賴賢小槻伊治等と學を講して、環翠軒宣賢の遺著なる四書諺解を購ひ、近臣の爲に大學を講じ、朝鮮に向て五經集註を求し事ども、世の知る所なるが、一朝國亡びて空し

く大内本の名のみ殘れり、而して大内文學は防長より轉じて四國に入り、以て海南學の一派を開きぬ、海南學の祖を南村梅軒と云ふ、亦周防の人、或は云ふ義隆の儒臣にして、五經集註を朝鮮に求めしは梅軒の勸に出づと、未だ確なるや否を知らず、梅軒は天文中忽如として土佐に現はれ、弘國城主吉良宣從の賓師と爲り、其の門に烈士吉良宣義を出し、遂に長居我部元親をして學を立て士を敎へしむるの氣運を開けり、其の事蹟は大日本敎育史資料に在り、其の宣經に告げし所の說を見るに、猶是れ半儒半禪なれば、禪門に於ける儒釋不二の理想中より出てし人なるべし、其の門に忍性、如淵、天室の三僧ありて、其の學說を傳へ、天室の門に谷時中を出し、小倉三省、野中兼山相踵ぎて輩出し、南學始て盛んに、山崎闇齋も亦吸江寺に崛起して、

崎門の一派を開き、梅軒の半儒半禪は一轉して、神儒同化と爲れり。

之を要するに後醍醐以前は、宋學の史證朦朧にして、傳來の人と時期との考證に、猶力を盡さざる可らず、後醍醐の元應以後に至りては、史證明白にして、已に研究時期に入れり、而して玄惠虎關の二大派に分れたり、玄惠派は朝廷に行はれしも、朝廷の衰ふると共に其學振はず、虎關派は禪門に行はれしが、禪の武家に歡迎さるゝと共に、宋學は禪學に伴ふて武家に行はれ以て北條足利氏より德川氏に及び、此に三百年の文化を開けり、蓋し禪と宋學とは異姓の同胞なり、孔釋其姓を異にするも、性と云へる母より生れ出でしは同じ、是を以て禪徒は宋學を喜べり、而して不文なる武人は、又禪宗の不立文字直指人心

を喜べり、是に於て宋學は又禪宗に伴ひて武人に行はれしなり、宋學は道義を敎へ氣節を皷舞するより、武人は禪に因て死生の關門を超脫すと共に、忠勇の武士道を養成したりき、此は北條氏の家法にして、足利氏之を學び、德川氏其の成例を襲蹈して、興學の初め人才を新註に取り、以て十五代の治を開けり、禪宗に伴はさる宋學を直に武人の前に說くも、果して能く行はるるを得たりや否やは疑問なり、且つ禪徒にして三敎不一を唱ふること道元の如くならしめ、儒を貶して講せざらしめば、則ち宋學の興衰は扨置き、我邦の儒敎は能く後日の復興を來したりしや否も亦疑問なり、足利氏の世朝廷の學衰へて、釋奠の禮廢し、博士の名、告朔の餼羊に過ぎず、此の時に當りて僧徒の儒釋不二を理想とし、外典を講して世敎を稗補する無く

んば、則儒學の衰滅や如何ん、程來の新說は我邦儒學衰頽の日に傳來して、學界を震蕩すること、歐米學說の舊日本を鼓動せしが如し、舊派の新派を忌むは、何の世か同じからざらん、花園院御記にも難謗ありしことを記され、中岩圓月の詩にも、藤原忠範等が伊洛に反對せしことを言へり、儒林世家の批難想見すべし、一方には又異を好み新を喜ふは人情なり、況んや元是れ異姓の同胞をや、禪徒の學を好む者、爭ふて新註を講じ、將軍に勸めて四書を讀ましむ、是に於て宋學は諸侯の國にも行はれて、名將の壁書條書等、皆學文を勵しつゝ武士道の發達を謀れり、亂離の間、世道の地に墜ちさりしは、豈僧學と武人の學との力に非ずや、然るに後世儒者の佛を忌める僧學の功を沒して其文權を竊むを責め、賴山陽の如きは北條氏を罪するに禪

を以す、是れ猶久旅の客、鄉に歸りて留主番し吳れたる隣人を撻つが如く、謂なき偏見なり。

禪徒は儒者に代つて儒學を維持したるのみならず、教化を普及せしめたる功績尤大なり、其は海內都鄙に大小の寺あり、寺は即ち學校なりしこと、南浦文集に日州目井の延命寺を指して鄉校と曰へるに徵すべし、即ち是れ後世の寺小屋なり、教育普及は訓點に非ざれば能はず、啻に儒生のみならず、商人も農夫も、四書を素讀して、略其の意義に通ずるを得しは、訓點の賜なり、古註にも訓點あり、然れとも粗略にして且つ刊本なく學ふに隨て附點せしものなれば、普及に便ならざりしを、四書集註の訓點は、岐陽に草創され、桂菴の紹述を經て文之に成り、如竹に至りて始て之を刊行し、以て津々浦々の寺小屋にも普

及せしめたる、豈教育上の偉功に非ずや、後ち道春點尤も世に行はれしが、道春點は惺窩點に據りしものにて、惺窩點は文之點を剽竊せし者なりとは、漢學紀源の說なり、其の說に云く、藤原惺窩明に之かんとして風に阻てられ、鬼界が島に漂着し、遂に薩摩の山川に入り、文之點四書を寺僧に得て、之あれば足れりとて歸京し、四書五經和訓の序を韓人姜沆に請ふに及びては、「日本諸儒未だ宋儒の理を知らず、予れ幼より師なし、獨學して和訓を施せり、日本宋儒の解を譯する者、此の書を以て原本と爲す」と云へり、是れ桂菴文之の功を竊む者なり云々、此の說如竹門人愛甲喜春の聞書に出で、潛隱之を信して漢學紀源に特書してより、今人の著書、皆之に據りて疑はず、獨り山田準氏の駁論を經史說林に見るのみ、喜春の聞書は、如竹の話を筆記

せし者なるが、如竹も喜春も質直の人なれば、誤を傳へて人を誣ふる者にあらず、然れども文中には臆記の誤と覺しきものもあり、潛隱は功を桂文二師に歸するに專にして、聊濤張の嫌なきにあらず、然れども山田氏の駁論亦未だ盡さゞる者あり、要するに此等疑似の事は、後人輙ち曲直を斷す可らず、疑を存して可なり、惺窩點は倭板書籍考に、慶長三四年時分に出でたり、板行にはなしとあり、頭書四書大全は惺窩點に據れりとぞ、林道春は惺窩に從遊せざる以前より、建仁寺に讀書して四書をも講じたれば、其の點も悉く惺窩に出でしにあらで、猶是れ五山讀法を受けし者ならん、倭板書藉考に、道春點は元和四年に成りて文之點以後に刊行すと云ひ、漢學紀源には、天和三年長尾某梓行の道春點四書卷尾の識語に、近代南浦創加訓點、羅

浮復潤色之」とあるを引けり、果して然らば訓點本刊行は、文之點尤も早きや明白にして、道春點の如きも多少其の法に據りし所もありけん、但し後世に行はれし道春點は天和改正點なれば、彼此對照に由なし、其後各種の訓點本出てし中には、文之點の痕迹を存する者なきに非す、其の世に行はれしこと盛なりしや知るべし。

以上は後醍醐帝以前に宋學傳來せし時期の臆考、及び宋學研究の史證明確なる後醍醐帝以後の趨勢、並に德川文學の盛運を醱酵醞釀せる足利時代の狀態にして、即ち是れ宋學の淵源なるが、慶元以降の文運勃興には二大原因あり、一は海內の人心、戰亂を厭ひて文治を思ひし大勢にして、一は征韓役の副產なり、織田信長は武井夕菴を用ひて禮樂を興さんとせしも、

大業中敗し、豐太閤は武功を貪りて未だ文治に暇あらず、德川家康の明眼達識は、夙に太閤百歲後の天下、自家の手に落つるを知りて、亂を厭ひ治を思ふの大勢を悟り、名古屋の陣中に惺窩を引見し、道春と清家との爭を制し、太閤薨後は儒生と學僧とを擢用して、北條足利の故智に加ふるに、助覇尊幕の略を以して、宋學を尊び覇業を賁飭せり、家康の志を成すに好都合なりしは、征韓役の戰利品にして、軍中の外交文書を掌れる陣僧は、五山文學の尾を掉ふと共に、諸將に勸めて典籍を收め、朝鮮固有の銅活をも鹵獲せしめ、活字工をも携へ歸りしより、印書の業盛に起れり、上に後陽成天皇の學を好ませたまふありて、慶長勅版成り、下に興學の將軍ありて、尊儒講學の風を開く、是れ豈氣運の際會に非ずや。

德川氏の初儒官の僧形僧官は、猶足利時代の儒釋一致に似たりしかども、精神に於ては早く已に儒釋の爭を來し、林道春の神社考は神佛混淆の非を辨せしが、水戸義公も亦佛を排して神を敬し、其特色なる皇統正潤の論は神皇正統記に據りて大日本史に顯はれたり、但し神皇正統記は北條氏を論すること平正なれとも、水戸派は朱子學の偏固に陷りて、足利氏を責むるや酷なるは、是れ爲にする所あるを以か、儒生僧服の非は先づ尾張敬公に唱へられ、水戸義公に率先せられ、元祿三年に至りて、幕府も儒官の改服改稱を行ひ、始て數百年來の積習を一洗して、儒釋分立の世と爲れり、初め家康宋學を尚ひしより、海內列藩靡然として風に嚮ひしが、伊藤仁齋出て、古義を唱え、物徂徠起りて古文辭學を講してより、程朱を攻擊する者出

で、訓詁學折中學又隨ひて爭ひ起り、門戸を標榜し、て一家言を爲す者少からざりしに、白河樂翁出るに及び、寛政三博士を拔擢して異學を禁じ、海内の學風遂に程朱に歸一したり、是より先き後水尾帝深く宋學を好ませられ、松永昌三に學校を立てさせ、論孟古註學庸新註の朝廷の舊慣を破りて、朝山意林菴に程朱を進講せしめられしも、幕威の熾なる、女帝をすら立てし世なれば、朝廷の學を復興するを得ず、彼の山崎闇齋の高足淺見絅齋、京師に在りて尊王の大義を皷吹し、靖獻遺言を著はして士氣を皷舞せしに、後ち竹内式部と「いふもの、靖獻遺言及び闇齋の神學を公卿の間に講して、遂に桃園天皇の御心を動か」し奉りしより、式部は逐はれ、其黨山縣「大」貳は斬」られたり、是れ正中の發難と相似て、而して尊王倒幕の陳勝吳廣たる者なり、

宋學は大義を辨し名節を磨き、士氣を鼓するに明效ある學問なり、故に後醍醐帝は之を用ひて建武中興の素を爲したまへり、幕府異學を禁して宋學に歸一せしは、學術の發達を害すること甚しかりしも、列藩士人をして名分を辨し士氣を皷せしむるには、著しき効果あり、維新の際には水戸と云ひ、薩摩と云ひ土佐と云ひ、長州と云ひ、多く勤王の志士を出しゝは、皆古より宋學に關係ありし土地なり、其の他各藩の勤王家皆讀書人にして、中にも程朱學者多かりき、讀書人に非されは大義を辨せす、大義を辨するは程朱學の本色なれはなり、則ち王政維新は宋學の功も亦與りて多きに居る者と謂ふべし。

以上は宋學の源委に關する概要なり、或は誤脱多からんことを恐れ、又粗漏を免れざるを愧づ、願くは會員諸君批正を下

したまへ、(當日の講演に言及せさりしを補ひしもあり、又棄去て記さゞるもあり、特に德川氏以後は世に專書多きを以て略し、薩摩の學風の如きは餘論に過ぎざりしを以て之を省けり、讀者之を諒せよ)、